【出展作家】

ウィット・ピムカンチャナポン　Wit Pimkanchanapong（タイ）

《Planetary Seed》2024　Courtesy of 100 Tonson Foundation

タイ・チュラロンコン大学建築学部卒業。現代技術を用いて、建築と彫刻を融合させた作品を制作している。芸術的な探求の他に、彼は熱心なサイクリストであり、長距離パドラーでもある。2014 年に長距離サイクリング・ネットワークを設立し、車や列車を使わずにタイ全土の農村地域を巡る旅を実施する。この経験によって得た、前近代の風景、社会、文化と現代のタイの風景に関する視点は、近年の芸術活動に影響を与えている。

カウィータ・ヴァタナジャンクール　Kawita Vatanajyankur（タイ）

《Shuttle》2018　Courtesy of the artist and Nova Contemporary

女性性、労働、消費主義の交錯について問いを投げかけ、それらに挑戦するために自身の身体を用いたパフォーマンス・ビデオを制作している。家財道具や機械工具といった反復的で過酷な作業を引き受けることで、彼女は人間と機械をハイブリッドしたサイボーグの役割を演じている。その映像は、商業広告に類似する一方で、直視することが困難であるほど過酷であり、人間の能力と女性の回復力を示している。

ハーディム・アリー ＋ ムムターズ・カーン・チョパン ＋ アリ・フロギー ＋ ハッサン・アティ
Khadim Ali + Mumtaz Khan Chopan + Ali Froghi + Hassan Ati

《Voice and Noise》2023

ハーディム・アリー（パキスタン）
1978 年パキスタン生まれ。現在はオーストラリア・シドニーとアフガニスタン・カブールを拠点に活動する。パキスタン国立芸術大学美術学部で古典細密画を、テヘランで壁画とカリグラフィーを学ぶ。彼が出自を持つ民族の差別や迫害や、他の少数民族の歴史を辿る作品を制作している。

ムムターズ・カーン・チョパン（アフガニスタン）
1990 年アフガニスタン生まれ。2013 年に戦争と差別によって祖国アフガニスタンからの脱出を余儀なくされて、それ以来、インドネシア・ジョグジャカルタを拠点に活動を行う。彼の作品は、移住、不確実性、仮想生活に関する深い個人的体験と集団的記憶から生まれている。

アリ・フロギー（アフガニスタン）
1995 年アフガニスタン生まれ。ハザラ出身の独学写真家、映像作家。過去 10 年間、難民としてインドネシアに住み、インドネシアの難民の日常生活を紹介している。

ハッサン・アティ（アフガニスタン）
1995 年アフガニスタン生まれ。独学で写真を学んだハザラ人写真家。過去 8 年間、難民としてインドネシアのリアウ州ペカンバルに暮らし、インドネシアの難民の日常生活を紹介している。

コラクリット・アルナーノンチャイ　Korakrit Arunanondchai（タイ）

Photo by Harit Srikhao

《Songs for dying》(still), 2021　Co-commissioned by the 13th Gwangju Biennale, Han Nefkens Foundation and Kunsthall Trondheim. Courtesy of the artist, BANGKOK CITYCITY GALLERY, Bangkok, Carlos/Ishikawa, London, C L E A R I N G, New York/Brussels, Kukje Gallery, South Korea

1986 年生まれ。ニューヨークとバンコクを拠点に活動するビジュアルアーティスト、映像作家、ストーリーテラー。アジアとアメリカでの多彩な活動を通して、文化移植やその混成性に埋め込まれた物語を伝えている。その作品群は、フィクションと詩を融合させ、さまざまな題材に関わる共感覚的体験を提供しており、主に家族、友人、同僚の生活や土地の神話などを主題とした作品を制作している。

チトラ・サスミタ　Citra Sasmita（インドネシア）

Courtesy of the Artist. Photo by Gus Agung, Niskala Studio

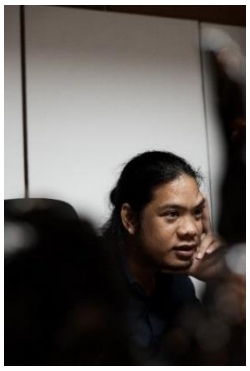
《Ode to the Sun》2020　Courtesy of Yeo Workshop. Photo by Ahmad Iskandar.

バリ島出身の現代アーティスト。バリ島の芸術や文化にまつわる神話や誤解を解き明かすことに重点を置いた作品制作を行う。芸術的活動を通して、社会的ヒエラルキーにおける女性の立場に疑問を投げかけ、ジェンダーの規範的な構成概念を覆すことに取り組んでいる。

チャールズ・リム　Charles Lim　（シンガポール）

1973 年生まれ。オリンピックなどに出場するセーリングの選手として活動したリムは、水や海洋に関する深い知識や経験を背景に、映像、インスタレーション、サウンド、録音された会話、テキスト、ドローイング、写真など多岐にわたる作品を制作している。本展出展作品は、作家が 2005 年より発表している《SEA STATE》シリーズの一つで、「海」というレンズを介してシンガポールの社会や政治状況、生態系や環境に対して多角的に言及している。

ナウィン・ヌートン　Nawin Nuthong（タイ）



《Empty Tomb》2024　Courtesy of the Artist and BANGKOK CITYCITY GALLERY.

幅広い媒体を通して歴史と文化メディアの繋がりを探求するタイ人現代アーティスト、キュレーター。神話や伝説を、ビデオゲーム、コミック、映画などから引用したポップカルチャーと融合させることで、歴史の理解と学びの再構成についてテクノロジーが果たすべき役割を検証している。モンクット王工科大学ラートクラバン校で映画学とデジタルメディアを専攻。

ナターシャ・トンテイ　Natasha Tontey（インドネシア）

Photo by Leandro Quintero

《Garden Amidst the Flame》2022

ジョグジャカルタとジャカルタを拠点に活動し、主にフィクションを用いて「造られた恐怖」にまつわる歴史や神話を考察し、それらを物語として伝える作品を制作している。既存の制度の視点からではなく、追放された存在や、ささやかで個人的な闘いに注目し、今とは異なる未来の可能性を探求している。

ホー・ツーニェン　Ho Tzu Nyen（シンガポール）

Courtesy of Singapore Art Museum

《T for Time: Timepieces》2023
Photo by Singapore Art Museum, courtesy of the artist and Kiang Malingue.

1976 年シンガポール生まれ。美術史から演劇、映画、音楽、哲学に至るまで、東洋と西洋の文化的側面を参照する作品は、神話的な物語と歴史的事実を融合させ、歴史、その記述、伝達に関する多様な理解を促す。彼の作品の中心的テーマは、東南アジアにおける文化的アイデンティティの多様性とそれに関する長期的な調査である。アーカイブ映像やアニメーションを組み合わせ、しばしば没入的で演劇的なインスタレーションを展開している。

メッチ・チョーレイ ＋ メッチ・スレイラス　Mech Choulay + Mech Sereyrath（カンボジア）

《Mother of River》2022

姉妹でも活動するカンボジア出身のアーティスト。姉チョーレイは映像作家、ジャーナリストであり、環境及び動物保護にまつわる作品制作を行っている。妹スレイラスは、新進のビジュアルストーリーテラーであり、短編映画《The Expired》が 2023 年の釜山国際映画祭（BIFF）で上映された。

ゲゲルボヨ　Gegerboyo（インドネシア）

《Bloom in Agony》2022

2017 年に 5 人のアーティストによって結成されたジョグジャカルタを拠点にするコレクティブ。現在はエンカ・コマリヤ（Enka Komariah）、プリィハモコ・モキ（Prihatmoko Moki）、アンジャリ・ナイエンギッタ（Anjali Nayenggita）の 3 名で活動を行う。現代の都市文化、ストリートアート、政治、社会、伝統文化から多くのインスピレーションを得て作品を制作している。コレクティブ名は、ジャワ島のムラピ山に実在し、周辺地域を噴火や熱雲から守る丘の名前に由来。ゲゲルが背中、ボヨがワニのことで、ゲゲルボヨは「ワニの背中」を意味している。

ジャッガイ・シリブート　Jakkai Siributr（タイ）

《Airborne (Phra Nakorn)》 Courtesy of CHAT (Centre for Heritage Arts & Textiles, Hong Kong)

織物や刺繍を用いた作品を中心に制作するほか、観客参加型のインスタレーションも手掛けるアーティスト。タイでは言及されない非公式の歴史や、個人的かつ地域的な歴史の交差、さらに近年はマイノリティに対する民族主義的差別が引き起こす紛争に関心を寄せている。そのような主題と、繊細な形態と素材の表現を対比させることで、現在進行中の微妙な緊張関係を浮かび上がらせている。

お問い合わせ先 前橋市役所文化スポーツ観光部文化国際課 アーツ前橋
【広報】井波・酒井・上田　　TEL: 027-230-1144　Email: press@artsmaebashi.jp
Instagram: @arts_maebashi　　X: @ArtsMaebashi　HP: artsmaebashi.jp